

個と孤

津川陽介

個と孤、この二文字は私の人生と常に一緒でした。個は「個性」の個、孤は「孤独」の孤です。

私は学生時代もサラリーマン時代も、常に自分の存在感を高めたいという意識が強かったように思います。

自らの能力はそれほど高いとは思っておりません。にもかかわらず、その能力の限界まで知恵を出し、人の意表を突く、人と違うことをする、人のやらないことを考える、の連続でこれまできました。この行動様式が、いつの間にか周囲の人々に印象として定着し、「中村は個性的なやつだ」といわれるようになったような気がします。

特に、地方公務員として長くサラリーマン時代を過ごした私はその世界が、財源と政策をセットで国からもらい、金太郎アメ的な「人罪」が形式的、建前に執行し、一切の本質的なものが排除されている世界でしたので、私の個性が貢献できる機会は限られていましたし、また個性的がゆえに協調性に問題があって孤独がずっと私の心を支配していました。

つまり、サラリーマン時代は仕事に関連して、個と孤の問題に悩んでいたのです。

しかし、一切の公職を辞しフリーとなって三年目になり、この問題から開放されたと思っていました。新たに個と孤の問題が私の心に浮上してきたのです。

個の問題は、私がフリーの立場になって「モノ書き」を生涯の仕事と定め、始めたときから起きてきたのです。それは、作品を書くための創造的な発想がほとんどでてこないという現実にぶつかったことです。

つまり、個性的な発想ができないという才能上の現実を突きつけられたのです。本当に才能がないのか、潜在的に才能はあるが、これまで全く別世界の仕事をやってきたため顕在化しただけのことなのか、私は今計りかねております。

それはともかくとして、今は、本を読み、政策、随筆、小説、ドキュメントなどに挑戦しております。いずれ、ここ数年のうちにその見通しができることを期待しております。

とにかく今は、私の創作力のできるものを、活字や作品にするという方針で、「モノ書き」を続けております。

次は孤の問題です。

こちらは、将来に対する漠然とした不安からくる孤独感です。フリーとなつて、モノ書きでもジョギングでも一定の達成感を味わいますが、しかし、その先は何なのだと、心の中で自問自答が始まることが多くなりました。

夜中にトイレに起きて再び床に就くとき、たまたま不安感が心に充満し孤独を感じるがあります。

朝、愛犬アニーと散歩するとき、時々街の散策のときフツと心の中に不安が湧いてきて、しばらくすると、その不安が周囲の風景や雑踏の騒音に消えていきます。

そのたびに、むなしさ、空虚感が心の中を風のように通り過ぎていくのを感じます。それは、死に向かつての助走であることははっきりしています。

人は目標を定め、それに向かつて邁進するときは何の不安も感じないものだと、私の経験から確信しております。

それは目標を達成するために必死だからです。目標に向かつて淡々と進む人の心は死をも超越する力があるのではないかと私は思います。

しかし、今は違います。私の生涯の仕事と定めた「モノ書き」にまだ徹底していないせいでしょうか。私にはわかりません。

家族との愛情の支えが足りないせいでしょうか。分かりません。母が亡き後仏事も毎日やっております。最近は何朝仏前で「般若心経」を二回ずつ

唱えております。祈りに心がけないからか、分かりません。「般若心経」は大変すばらしいお経だということで、解説書で勉強しております。

また最近梅原猛の宗教哲学書にも凝っておりますが、しかし、これで心の平安が得られるはずありません。

これから、孤に対する心の葛藤が死ぬまで続くような気がします。かくて「個と孤」は生涯の伴侶として私は一生付き合わなければならないのだ、と

最近感じるようになりました。いや、付き合っていかなければならない、とポジティブに考えるようになりました。

なぜならば、この二つの命題と付き合っていくことが私の日常なのだから、と少しずつ思うようになってきたからです。